

野鳥のヒナは拾わないで下さい！

春から秋にかけて、こんな連絡が振興局に多く寄せられます。

「野鳥のヒナをみつけたが親鳥がいない。どうすればよいか。」

「巣から落ちたヒナがいる。助けてあげてほしい。」

「地面にいるヒナを見つけて救護した。周辺に巣もなく、どうすればよいか。」

「はぐれたヒナがいたので、家で飼っていいですか？」

ヒナという小さな命を大切にしたい・大事にしたいという気持ちがあるからこそ、わざわざ調べてご連絡していただいていると思います。

しかし連絡をいただいても、振興局では基本的にヒナを救護できません。理由としては、次の2つがあります。



① ヒナと親鳥を引き離すことの問題

野鳥のヒナを救護した場合、親鳥の代わりにヒナを一人前の鳥(成鳥)に育てなければいけません。育てるために、どんなことが必要になるか考えてみましょう。

- ヒナを育てるため、1日中あたかな温度の環境を作らなければいけません。
- 小型野鳥のヒナの場合は1時間に1度、大型野鳥のヒナの場合は3～5時間に1度など、短い間隔で巣立つまでずっとエサを与え続ける必要があります。ヒナは食欲旺盛ではありますが、食べない場合は無理に食べさせることも必要となります。
- 成鳥になるために、飛ぶことやエサをとる方法を教えなければいけません。
- 外敵から身を守る方法を教えなければいけません。
- 同じ種類の野鳥とのコミュニケーションの取り方を教えなければいけません。

人間があたたかな環境を作り、エサを与え続けることで、からだは大きくなるでしょう。しかし、ヒナに自然界での生き方を教えることができる人間はいません。ヒナの頃に、親鳥から学ぶべきことを学ばず、大きくなっただけで野生の世界に帰しても、飛び方もわからず、エサも取れなければ死を待つのみになってしまいます。人間が親鳥の代わりに育てるということは、なかなか難しいことなのです。

② 人間が介入することの問題

親鳥のいないヒナを見つけ、衰弱や外敵に襲われる危険があるのではないかと心配して、小さな命を救いたいという思いがあるからこそ、ご連絡いただくことは承知しております。

外敵と表現しましたが、ヒナの外敵となるカラス・ヘビ・他の種類の鳥たちも同じ自然界の一員です。外敵に襲われることも、食べる・食べられる関係もすべて含めて自然界なのです。

野鳥のヒナは、生まれたからといってすべてが成鳥になるわけではありません。発育不良、ヒナ同士の生存競争、他の動物に食べられたりします。1羽のヒナを救護すれば、ヒナを食べるはずだった動物の食料が1つ消えます。救護が繰り返されると、今までヒナを食料にしていた動物の生活が困難になる恐れがあります。その結果、ヒナを食べていた動物の数が減り、その動物を食料にしていた動物も食べ物に困り、自然界で連鎖して食物連鎖がうまく作用しなくなり、最終的には生態系を壊してしまう恐れもあるのです。

鳥獣救護の原則は、「自然界に対して必要以上に手を加えないこと」です。人間の悪気ない介入によって、自然界に悪影響を与えることは、誰の本望でもありません。「ヒナがいる」という断片的に見た光景で考えるのではなく、自然界全体として考えることも必要です。

ここで、最初の連絡内容をもう一度考えてみましょう。

●野鳥のヒナがいたが親鳥がいない

→近くに親鳥がいても、親鳥から見れば巨大生物である人間がいるので、たとえヒナがいたとしても危険を察知して隠れてしまいます。まずはその場から離れていただき、遠くから見守ってください。

●巣から落ちたヒナがいる→次の可能性があります

①巣立ち前で飛び練習をしていて休憩していたが、人間から見たら巣から落ちたように見えただけの可能性があります。巣があってヒナもいるということは、親鳥も近くにいますので、巣立つまでは遠くから見守ってください。

②ヒナがぎゅうぎゅうの巣から落とされた。野鳥は、全てが成鳥になるとは限りません。ヒナ同士の生存競争に負けて、弱いヒナが落ちたのかもしれませんが。

●周辺に巣もなかったので、ヒナを救護した→次の可能性があります

①人間の目に付かない場所に巣がある可能性

②巣立ち直後のヒナはあまり動かないことがあるので、単にじっとしてただけの可能性

③巣立ちから当分の間は親鳥と行動するので、少し離れた場所に親鳥がいる可能性

※「ヒナを救護した」ということを人間に置き換えると、親のいない隙に子どもを連れ去るようなものです。すぐにヒナを見つけた場所に戻してあげてください。

●ヒナを家で飼いたい

→野鳥を許可なく飼うことは、法律(鳥獣の救護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律)に違反する行為となります。現在、愛玩(ペット)目的での飼養許可は行っておりません。

<それでも心配な場合は>

どうしてもヒナのことが心配だという場合は、次のことをしてください。

- 巣が近くにある場合は、巣に戻す。

(多くの鳥類は嗅覚が鋭くないので、人間のおいが付いても親鳥が子育てを放棄することはありません。親鳥のいない時に、そっと巣に戻してください。)

- 近くに茂みがある場合は、茂みに置く。

- 木の枝に、カップ麺の空き容器を固定して、その中にヒナを入れる。空き容器が深くてヒナがすっぽり隠れてしまう場合は、ヒナの顔が見えるぐらいになるように容器を切って調節する。(茂みや別の高い場所にヒナを置いても、鳴き声に親鳥は反応して子育てをします。)

<やむを得ず野鳥を触る場合は>

ヒナを移動させたり、死体の回収など、やむを得ず野鳥を触る際は次のことをしてください。

- 素手では触らずにゴム手袋等を使って作業を行う。
- 作業を終えたら手洗い・うがいを行う。

